

第2章「新入生の保護者調査」の結果

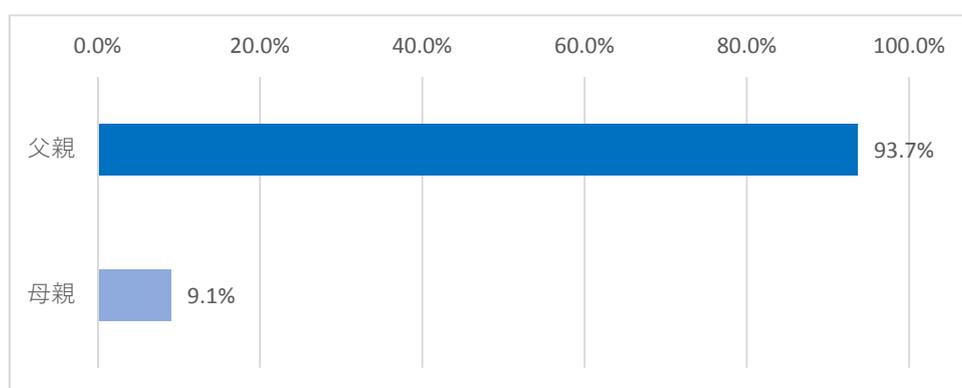
第2章では、新入生の保護者383名に対する調査結果について報告する。

(1) 家庭の暮らし向き

はじめに、新入生の家庭の暮らし向きについて、①主な家計支持者、②家計支持者の職業、③家計支持者の年収、④世帯年収、⑤大学入学後の家庭の暮らし向きについて示す。

① 主な家計支持者

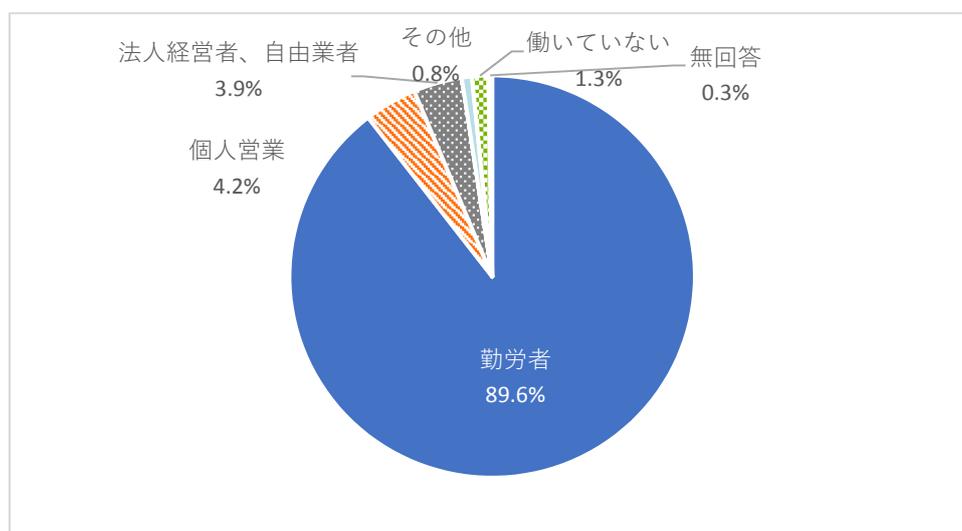
図表 1-1 は、新入生の主な家計支持者について尋ねた結果である。主な家計支持者は、全体の93.7%が「父親」、9.1%が「母親」である。複数回答を含むため、父親と母親と両方を回答した場合が含まれている。この傾向は平成29年度と同様である。



図表 1-1 家計支持者

② 家計支持者の職業

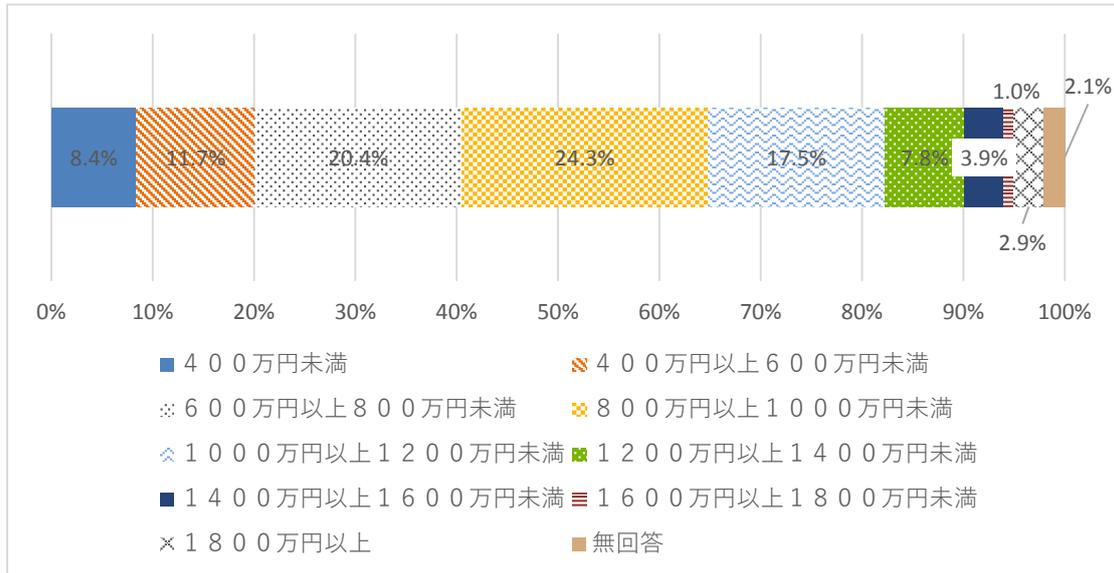
図表 1-2 に主な家計支持者の職業について示す。家計支持者の職業は「勤労者」が全体の89.6%を占め、次いで「個人営業」4.2%、「法人経営者、自由業者」が3.9%である。平成29年度新入生の保護者も同様の傾向を示した。



図表 1-2 家計支持者の職業

③ 家計支持者の年収

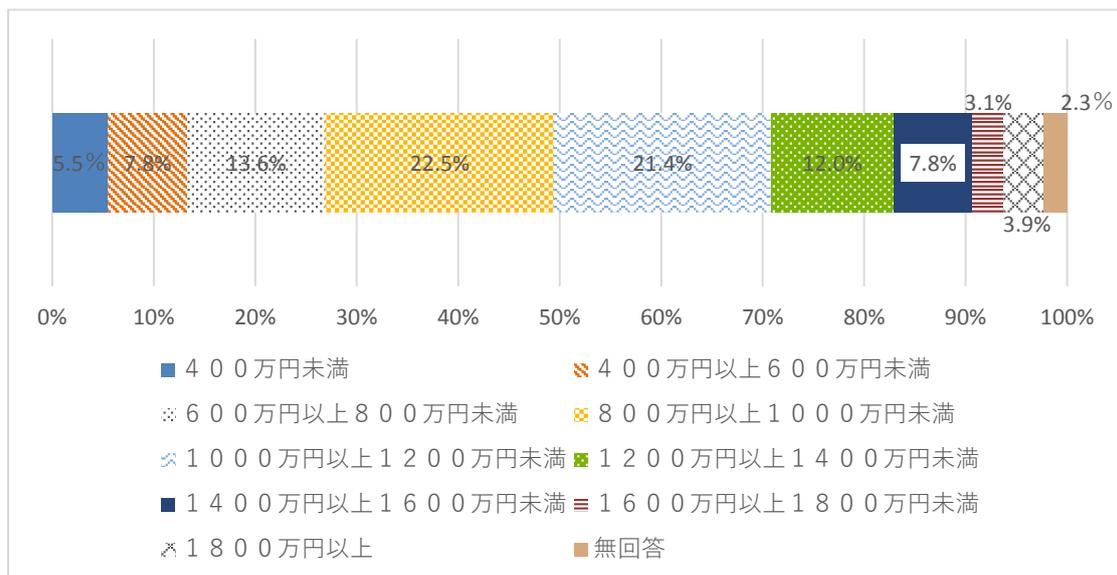
図表 1-3 に新入生の家計支持者の年収について示す。「800 万円以上 1000 万円未満」24.3%が最も多く、次いで「600 万円以上 800 万円未満」20.4%、「1000 万円以上 1200 万円未満」17.5%と続く。この傾向は平成 29 年度新入生の保護者とほぼ同様である。



図表 1-3 家計支持者の年収

④ 世帯年収

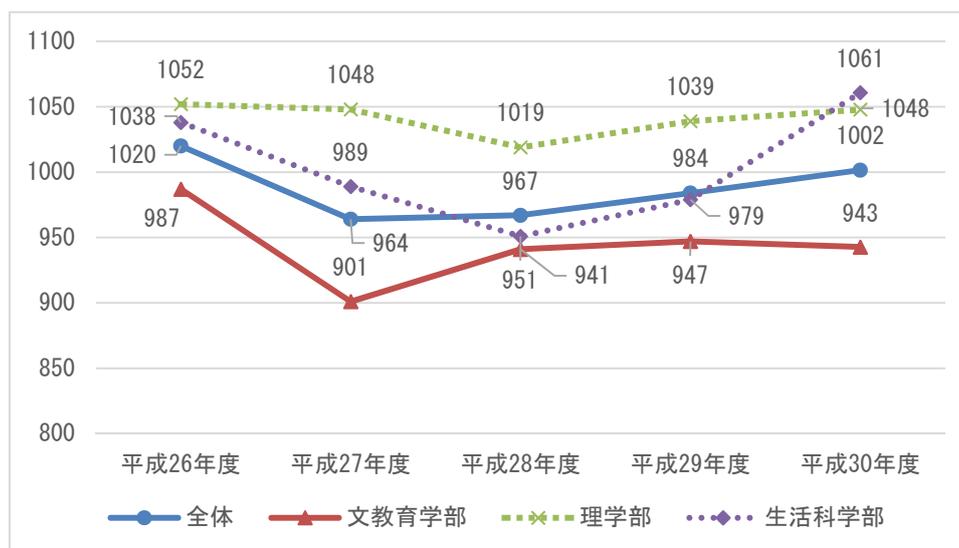
新入生の家庭の世帯年収について、家計支持者同様に尋ねた結果が図表 1-4 である。全体でみると、「800 万円以上 1000 万円未満」が 22.5%と最も高く、「1000 万円以上 1200 万円未満」21.4%、「600 万円以上 800 万円未満」13.6%がそれに続く。平成 29 年度と同様の傾向ではあるが、1000 万円以上の世帯収入の割合は 48.2%で、平成 29 年度より 3.3 ポイント上昇した(お茶の水女子大学 2017a)。



図表 1-4 世帯年収

『平成 28 年度学生生活調査』（日本学生支援機構 2018）によると、家庭の年間収入別学生数の割合（大学昼間部）について、世帯年収が 1000 万円を超える家庭は全体の 26.1%、国立大学・女子では 28.7%である。それに対し図表 1-4 に示すように、本学新入生の家庭のうち、世帯年収が 1000 万円を超えている家庭は少なくとも全体の 48.2%を占めており、家庭の世帯年収は全国水準に比べて、高い方に偏っている。これは、平成 29 年度新入生でも同様の傾向である。

参考として、図表 1-5 に、各カテゴリーの中央値に基づき、平成 26 年度以降の新入生の家庭の世帯年収平均（推計）の推移を示す。年度による差異はあるが、この 5 年の平均世帯年収は 1000 万円前後となっており、学部別には理学部が高い傾向が見られた。

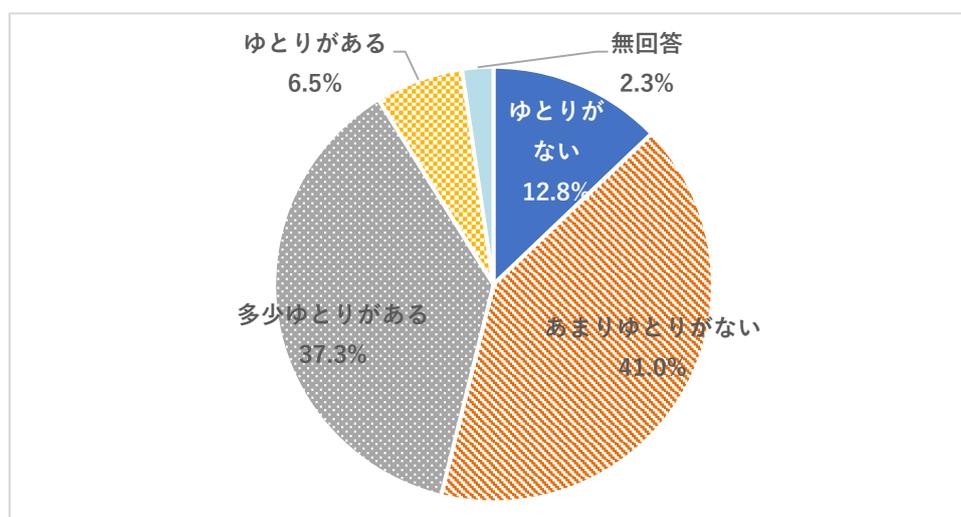


図表 1-5 世帯年収平均（推計）

⑤ 大学入学後の家庭の暮らし向き

図表 1-6 に、新入生が大学に入学した後の家庭の暮らし向きについて尋ねた結果を示す。

全体で見ると「あまりゆとりがない」が 41.0%と最も高く、「ゆとりがない」12.8%と合わせると全体のおよそ 5 割超の家庭が「ゆとりがない」と回答している。この結果は平成 29 年度においても同様であった。



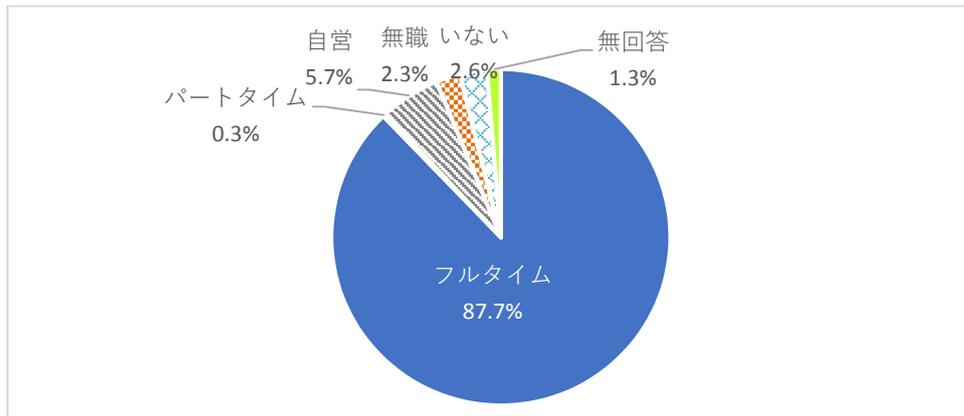
図表 1-6 入学した後の家庭の暮らし向き

(2) 親の職業・学歴

本節では新入生の親の職業や学歴について、①親の勤務形態および職種、②親の学歴について示す。

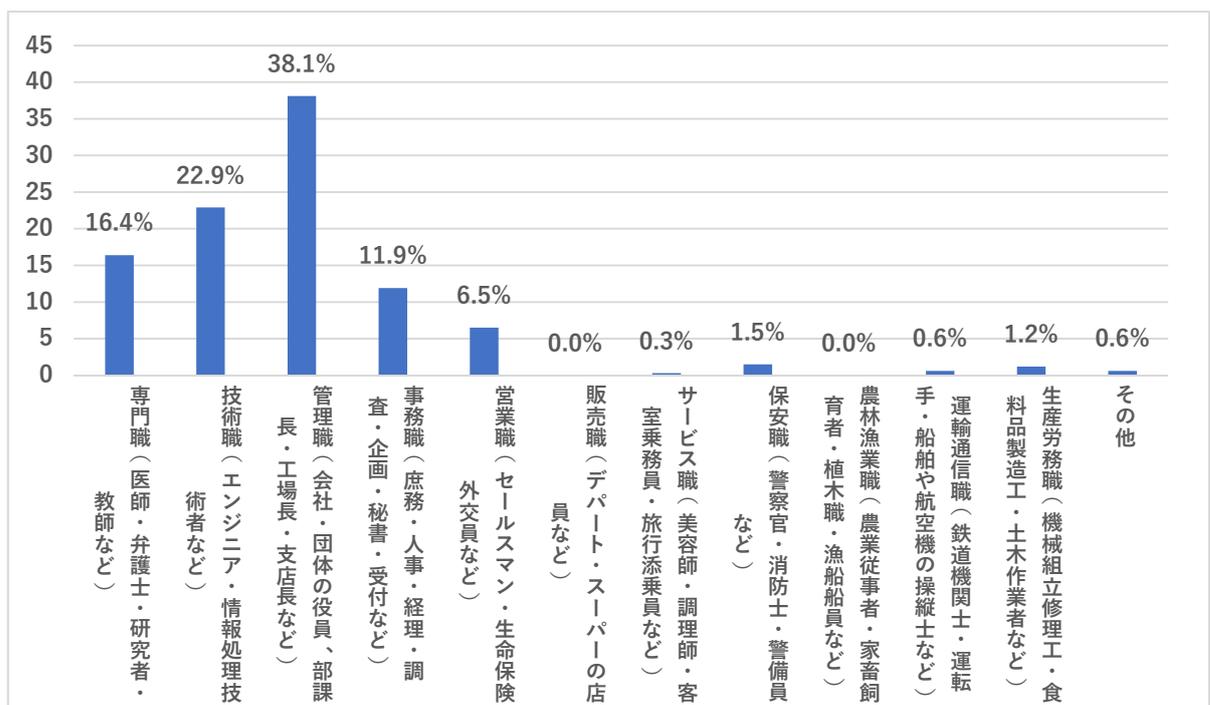
① 親の勤務形態および職種

図表 2-1 は、新入生の父親の勤務形態について、「フルタイム勤務」「パートタイム勤務」「自営」「無職」「いない」別に尋ねた結果である。新入生の父親の勤務形態は「フルタイム勤務」が 87.7% と約 9 割を占め、次いで「自営」が 5.7% である。これらの勤務形態の割合は例年と同様である。



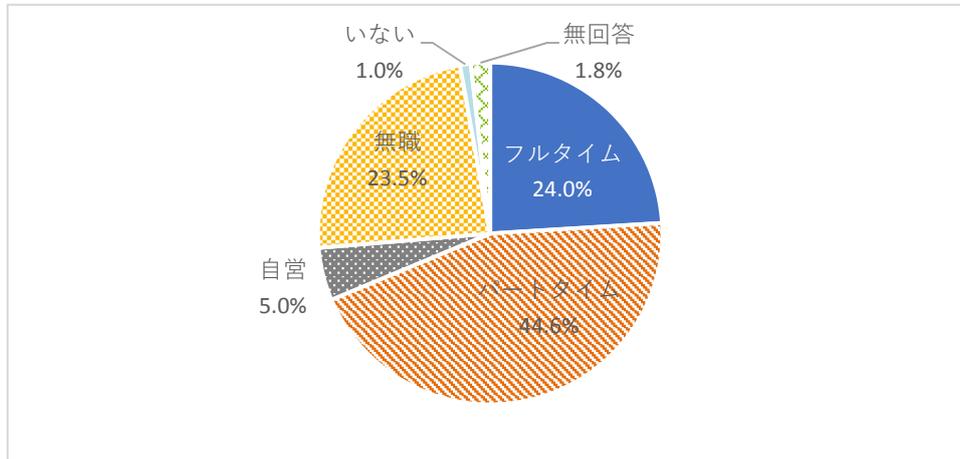
図表 2-1 父親の勤務形態

次にフルタイムで勤務する父親だけに職種を尋ねた結果を図表 2-2 に示す。最も多い職種は、管理職（会社・団体の役員、部課長・工場長・支店長など）38.1% である。次いで、専門職（医師・弁護士・研究者・教師など）が 16.4%、技術職（エンジニア・情報処理技術者など）22.9% である。この傾向も平成 29 年度と同様である。



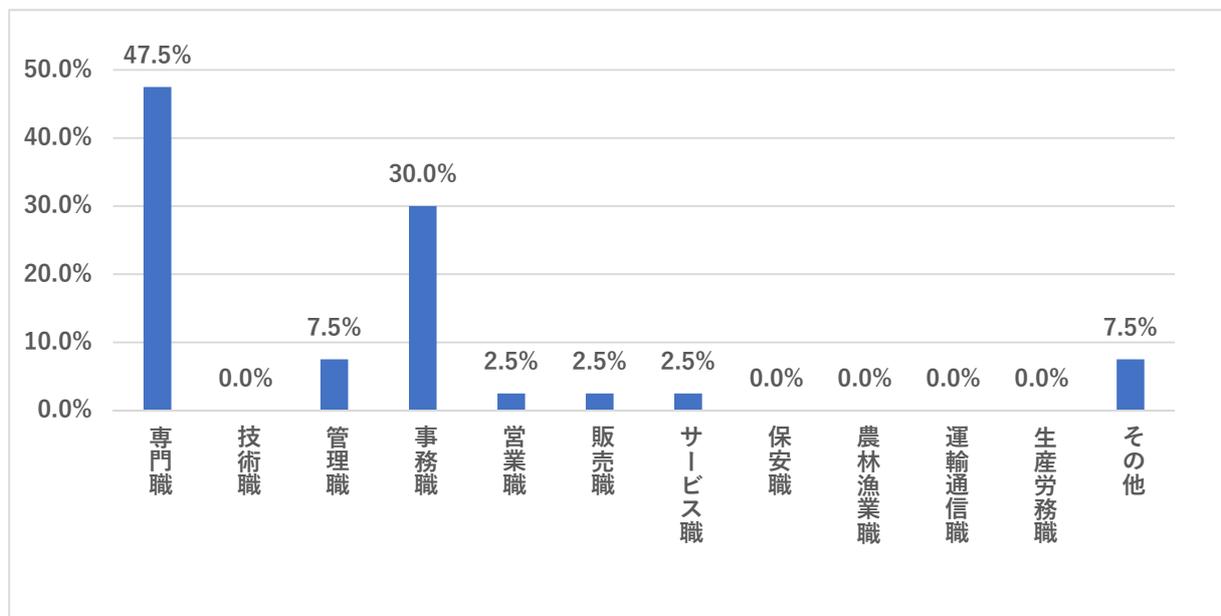
図表 2-2 父親の職種

同様に、新入生の母親の勤務形態について尋ねた結果が図表 2-3 である。「パートタイム勤務」が全体の 44.6%で最も多く、「無職」23.5%、「フルタイム勤務」24.0%と続く。平成 29 年度の新入生と比較し、パートタイムの割合が 7 ポイント強上昇し、無職が減少している。フルタイム・パートタイムを合わせて新入生の約 7 割の母親が就業していることが示された。



図表 2-3 母親の勤務形態

次にフルタイムで勤務する母親だけに職種について尋ねた結果を図表 2-4 に示す。最も多い職種は、専門職（医師・弁護士・研究者・教師など）47.5%、事務職（庶務・人事・経理・調査・企画・秘書・受付など）30.0%、管理職（会社・団体の役員、部課長・工場長・支店長など）7.5%と続く。父親と比較をすると、母親は専門職および事務職の割合がそれぞれ高く、管理職は少ない。この傾向は平成 29 年度も同様であった。

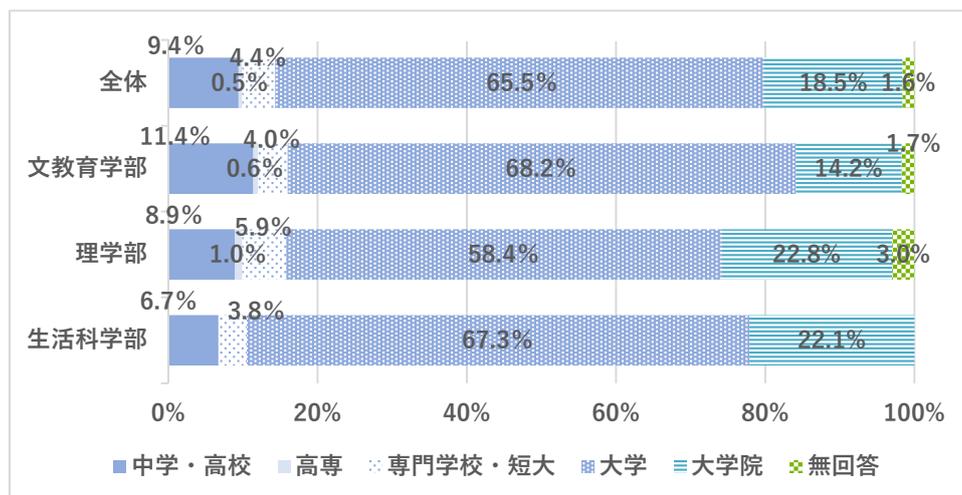


図表 2-4 母親の職種

② 親の学歴

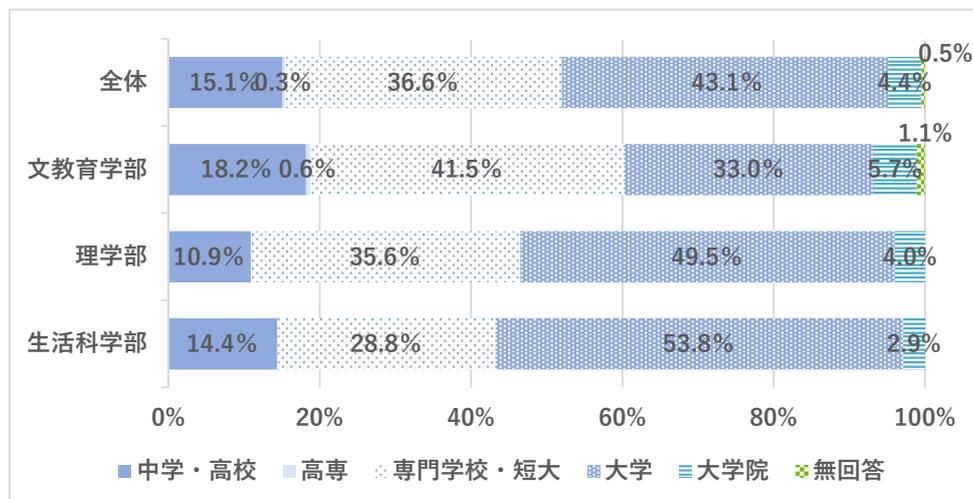
図表 2-5 は、新入生の父親の最終学歴を「大学院」「大学」「専門学校・短大」「高等専門学校」「中学・高校」別に集計した結果である。全体でみると、「大学」が 65.5%と最も高く、続いて「大学院」18.5%、「中学・高校」9.4%であり、例年同様の傾向が示された。

学部別では、「大学院」の割合が理学部 22.8%、生活科学部 22.1%と高い傾向が見られる。『平成 22 年度国勢調査』（総務省統計局 2011）によると、最終学歴が大学・大学院である男性は 28.7%であり、これと比較すると平成 30 年度新入生の父親の学歴はかなり高いほうに偏っており、この傾向も平成 29 年度と同様であった。



図表 2-5 父親の最終学歴

同様に、新入生の母親の最終学歴について尋ねた結果が図表 2-6 である。全体で「大学」43.1%、「専門学校・短大」36.6%、「中学・高校」が 15.1%である。学部別では、生活科学部と理学部では「大学」がそれぞれ 53.8%、49.5%と高い。『平成 22 年度国勢調査』（総務省統計局 2011）によると、最終学歴が大学・大学院である女性は 11.9%であり、これと比較すると父親と同様に平成 30 年度新入生の母親の学歴も高いほうに偏っている。



図表 2-6 母親の最終学歴

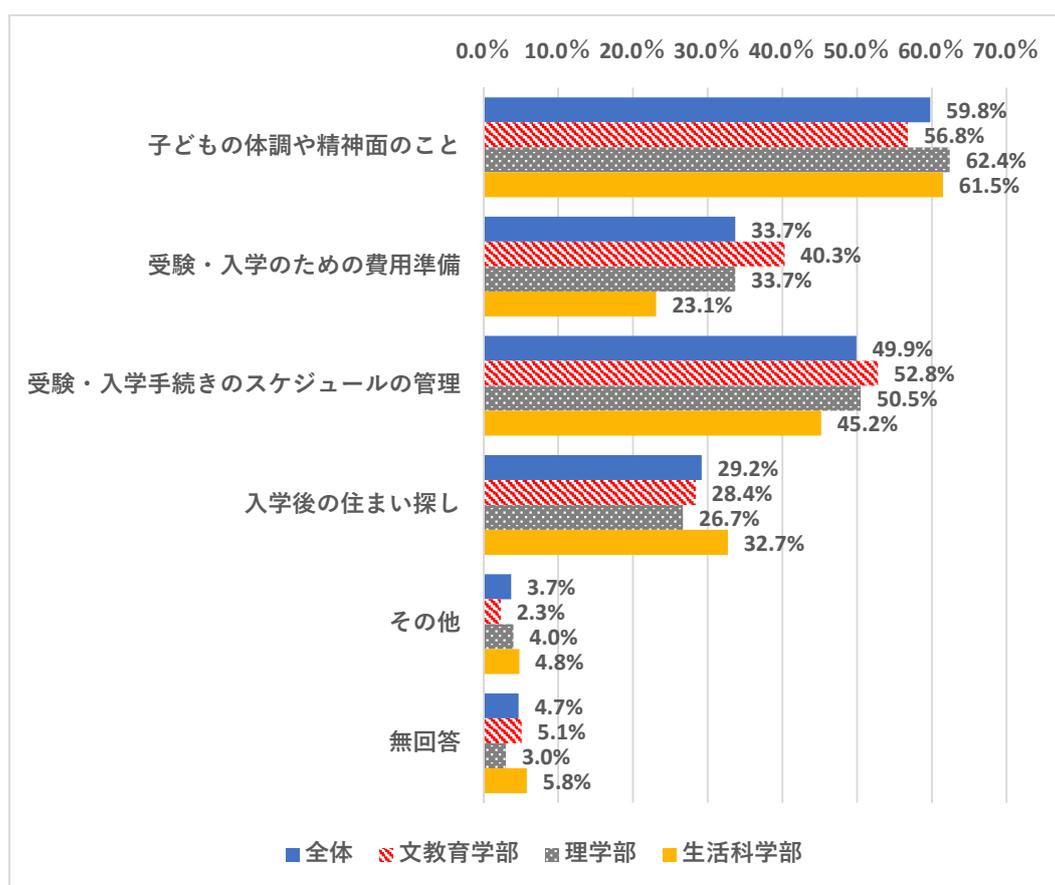
(3) 大学生生活の不安・心配事

本節では保護者から見たご子女の大学生生活の不安・心配事について、①受験から入学までに困ったこと、②大学生活が始まって心配なこと、③本学の学生支援活動で期待するものを示す。

① 受験から入学までに困ったこと

図表 3-1 は、受験から入学までに困ったことについて、複数回答可として尋ねた結果である。

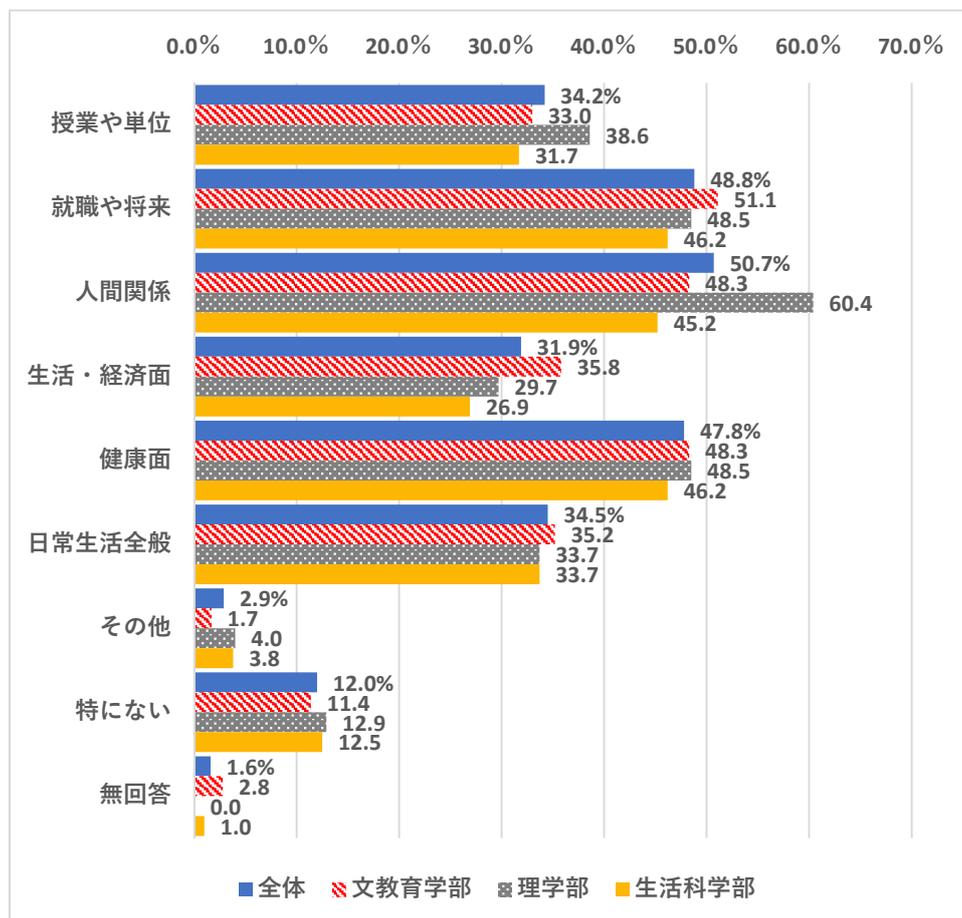
困ったこととして「子どもの体調や精神面」が全体の 59.8%と最も高く、「受験・入学手続きのスケジュールの管理」が 49.9%と続いている。学部別では、文教育学部の保護者が「受験・入学のための費用準備」に回答する割合が高い傾向が見られた(40.3%)。



図表 3-1 受験から入学までに困ったこと

② 大学生生活が始まって心配なこと

図表 3-2 は、大学生生活が始まって心配なことについて、複数回答可として尋ねたものである。心配なこととして、全体で「人間関係」50.7%、「就職や将来」48.8%、「健康」47.8%が高かった。学部別では、理学部では、「人間関係」(60.4%)、「授業や単位」(38.6%)、文教育学部では、「生活・経済面」(35.8%)と、他学部よりも心配する親の割合がやや高い傾向が見られた。

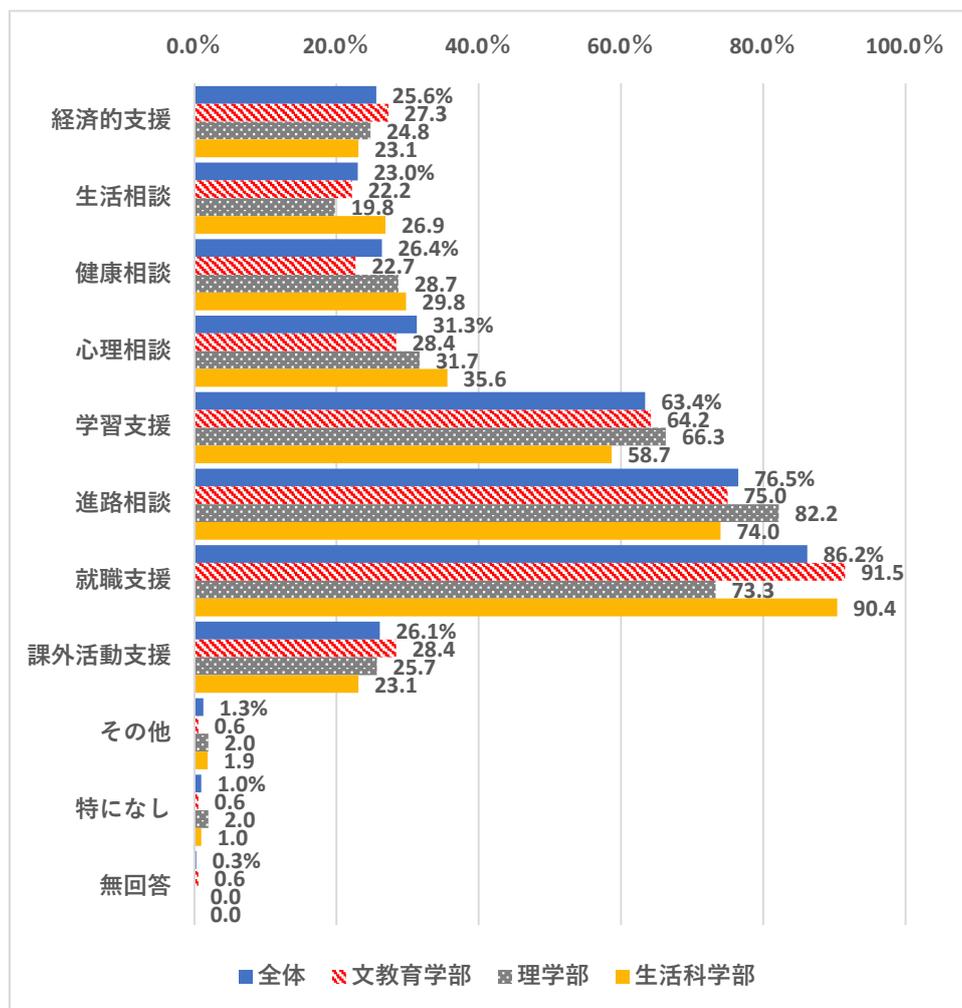


図表 3-2 大学生生活が始まって心配なこと

③ 本学の学生支援活動で期待するもの

図表 3-3 は、「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」の調査項目を参考に、本学の学生支援活動に期待するものについて、複数回答可として尋ねた結果である。

「就職支援」が全体の 86.2% で最も高い。次いで「進路相談」76.5%、「学習支援」63.4% が続くが、この傾向は平成 29 年度新入生の保護者でも同様である。学部別では、文教育学部では特に「就職支援」への期待が高かった(91.5%)。生活科学部でも文教育学部同様に「就職支援」への期待は高いが(90.4%)、「生活相談」「心理相談」への期待が他学部よりも高い傾向が見られた。理学部では「進路相談」が 82.2% と他学部より高かった。



図表 3-3 本学の学生支援活動で期待するもの